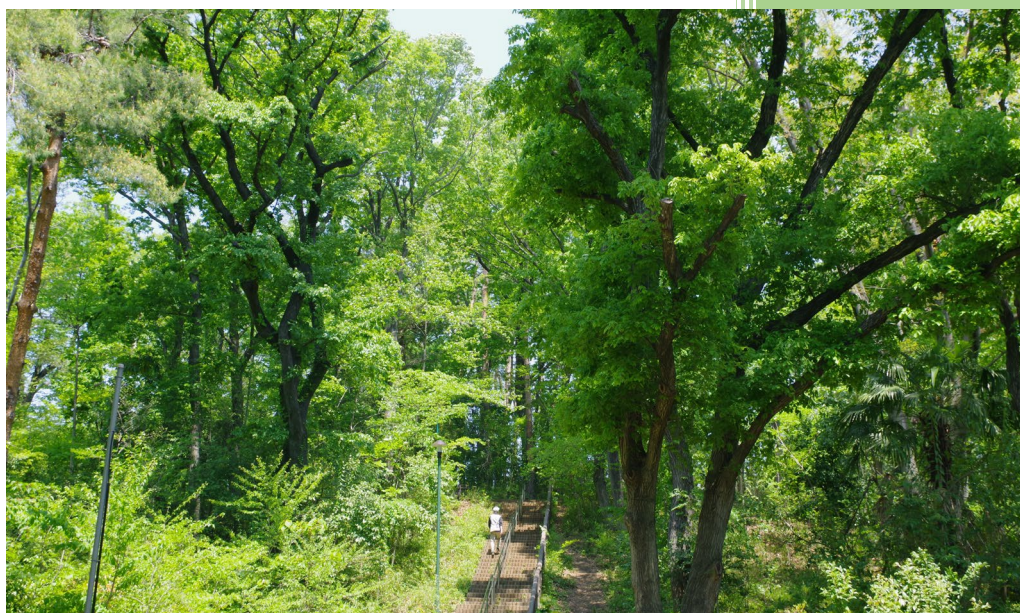


市民協働による生物多様性保全のための

武蔵台緑地 植生管理ガイドライン



府中市

目 次

I. 武蔵台緑地の自然	2
II. 保全・管理の方針	4
III. ゾーニングと目標植生	6
IV. エリアごとの植生管理方針	
A 松林エリア	8
B1 雑木林(林床復元)エリア	9
B2 雑木林(階層発達)エリア	10
B3 雑木林(広場)エリア	11
C 崖線林エリア	12
D 屋敷林エリア	13
V. 作業の進め方	
1 ササ類の繁茂をおさえる	14
2 常緑樹を取り除く	16
3 低木を整理する	17
4 園芸植物の拡大を防ぐ	18
5 後継樹を育てる	19
6 下草刈りをする	20
7 落葉かきをする	21
8 発生材の処理	21
9 林縁を保全する	22
VI. 武蔵台緑地の希少植物	23
参考文献	24

◆武蔵台緑地とは

武蔵台緑地は、府中市北西部の国分寺崖線の斜面に帯状に残された樹林です。府中市内の樹林としては浅間山に次ぐ規模をもっています。東側に隣接する国分寺市の黒鐘公園や伝鎌倉街道沿い樹林とともに、この地域本来の自然環境を残す貴重な緑地です。これまでに行われた市民などによる調査では、約320種の植物と約290種の昆虫が記録されており、生物多様性保全のうえでもきわめて重要な場所であるといえます。

また、府中市の都市計画マスタープランや「緑の基本計画」においては、「地域における緑の拠点」に位置づけられており、市の景観計画に基づく景観形成推進地区にも含まれています。



空から見た武蔵台緑地

◆崖線の地形

武蔵台緑地を含む国分寺崖線は、立川市から大田区まで東西方向につらなる崖で、約3万年前に古多摩川が侵食してできた地形と考えられています。崖下には湧水が点在し、地元ではハケと呼ばれてきました。武蔵台付近では崖の高さは10mほどにすぎませんが、斜面であるため開発を免れ、変化に富む植生が残されています。また、帯状につらなる崖線の緑は、動物や鳥類の移動経路としても重要な役割を果たしています。

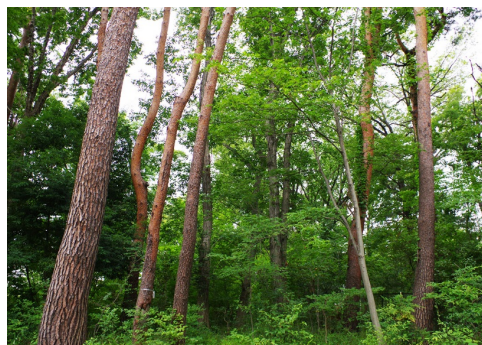
明治中期の地図を見ると、武蔵台付近の崖線からその上の平坦地（現在の多摩総合医療センター敷地）は松林や雑木林（薪や堆肥にする落葉を採取する農用林）で、崖線の下には湿地が広がっていたことがわかります。

◆崖線の緑の特徴

武蔵台緑地では、浅間山などとよく似た、コナラやクヌギを中心とした雑木林が最も広い面積を占めています。しかし、崖線という地形を反映して、それとは異なる特徴をもった部分もみられます。斜面の下部にはケヤキなどが多く、台地上に一般的な雑木林よりは、山地の渓谷林に近い林になっています。一方、崖線の上の平坦地では、府中市内では唯一となったアカマツ林もあります。これらは手つかずの自然林ではありませんが、人の利用とのバランスによって、崖線らしい特徴を失うことなく維持されてきました。そのため、武蔵台緑地には市内でここにしかみられない植物や昆虫も多数生育し、地域の「生物多様性ホットスポット」となっています。



ケンボナシ 崖線に特徴的な樹種。



市内で唯一、林床まで残っているアカマツ林。

◆武蔵台緑地の現状

武蔵台緑地では、これまで明確な目標をもった植生管理が行われてきませんでした。そのため、アズマネザサ（篠）の密生や常緑樹の増加により遷移が進行し、うっそうとした藪のようになりつつあります。人の利用とのバランスがとれた姿が損なわれた結果、過去30年余りで絶滅したり、数を大きく減らした生き物も多くいます。

こうした変化は、公園利用者の安全確保や景観の面でもふさわしいとは言えません。地域の自然環境と生物多様性を保全し、市民にとっても快適な緑地をつくるためには、武蔵台緑地の特徴を生かした植生管理を行うことが必要です。



常緑樹の侵入が著しく、やぶ状になった雑木林。



武蔵台緑地から姿を消した植物の例（写真は浅間山）。左：ヤブレガサ、右：リンドウ

武蔵台緑地では、次の4つを基本的な方針として保全・管理を行います。いわゆる「美化」や「愛護」ではなく、崖線林の生態系を保全することを目的とした活動であることを意識する必要があります。

1. 崖線の地形を生かす

崖線林の保全には、崖に沿った横方向のつながりや、斜面の上部から下部への縦のつながりを維持することが非常に大切です。地形そのものの改変や、土壌のかく乱（土を掘り返したり、耕したりすること）を避け、場所ごとの植生の違いに応じた管理を行います。

2. 遷移*の進行をおさえる

武蔵台緑地のもっとも大きな問題は、常緑樹の増加やササ類の繁茂です。明るい松林や雑木林であった場所がうっそうとした藪になると、生育できる生き物が限られ、生物多様性は低下します。そのため、常緑樹やササ類の極端な増加を防ぎ、遷移の進行を抑える管理を行います。

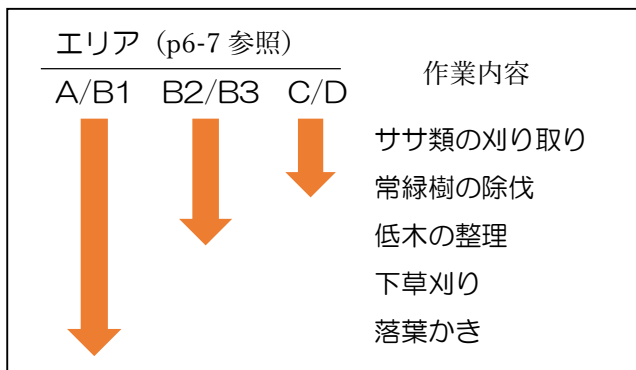
* 遷移：植生が時間とともに移り変わること

3. 特定の「種」ではなく樹林を守る

武蔵台緑地には、市内ではここにしか生育しない植物も多いため、それらの生育場所が破壊されないよう留意します。ただし、珍しい植物やきれいな花が咲く植物だけを増殖させることは、生物多様性を豊かにすることになりません。樹林の構成種すべて（外来種を除く）が持続的に生存していくことができる環境を維持することが大切です。

4. 持ち出さない、持ち込まない

植物や昆虫をむやみに採取することはもちろん、武蔵台緑地に生育していない植物を他の地域から持ち込んで植えたり、飼育していた昆虫や動物を放したりすることも避けます。武蔵台緑地の「個性」を大切にすることが生物多様性の保全につながります。



どのような管理作業を行うかは、樹林の現在の状態と、目標とする姿によって異なります。エリアごとに目指す樹林の姿を定め、それに近づけるために必要な作業を選択します。

また、効果的な管理を行うためには、作業の順序も重要です。基本的には、ササ類→低木→草本の順に手を入れていきます。

樹林の管理作業の基本的な順序
矢印の方向に作業を進める。



作業は急がず少しずつ

樹林の管理作業には、「きれいになった」という達成感を求めてしまいがちです。しかし、樹林の環境を急激に変化させると、予期せぬ変化を引き起こすことがあるので注意が必要です。たとえば、10年以上も常緑樹やササが密生していた場所を一気に切り開いて明るくしても、すぐに雑木林の植物が生えてくるわけではありません。土壌中に眠っている種子や地下茎には寿命があるためです。今まで暗かったところに光が当たり、急に落葉の分解が進むと、雑草的な植物の侵入を招いて、かえって手入れが大変になることもあります。

管理作業を行う際は、複数の作業を同時かつ集中的に行うのではなく、1年ごとに作業内容を決めて、少しずつ目標とする姿 (p8-13) に近づけてください。作業後の植生の変化をそのつど確かめ、自然と対話しながら作業を楽しみましょう。



安全のために

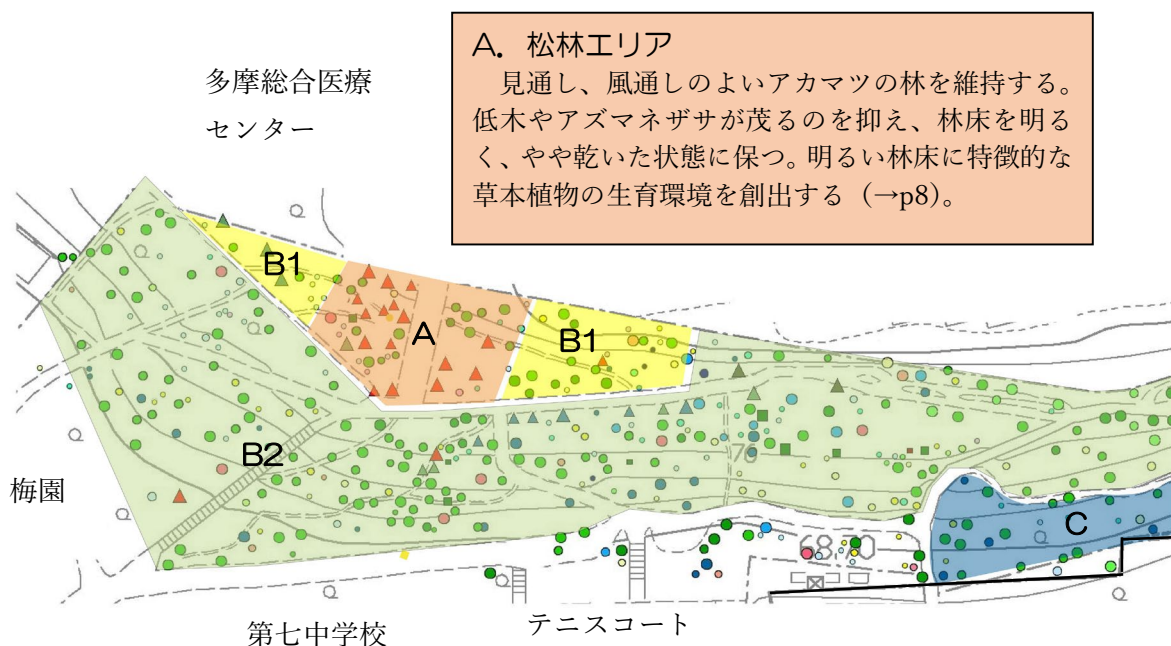
本冊子で解説する作業は、チェーンソーや刈払い機といった機械を使わず、鎌、のこぎり、熊手など誰でも扱える道具を用いて行うことを想定しています。枯木の伐倒など危険をとまなう作業は、市民が行うことなく、必ず公園管理者が行います。また、手作業であっても、事前に熟練者による講習を実施するなど、十分な安全対策を講じる必要があります。

《公園管理者での対応を必要とする主な事例》

- 樹木の立ち枯れ、倒木
- 落下しそうな枯れ枝
- 看板・柵など設備の破損
- 粗大ゴミ等の投棄

武蔵台緑地にはいくつかの森林タイプがみられるため、あらかじめどの区域でどのような樹林を目指して管理するのか、区域分け（ゾーニング）を行います。崖線の地形と樹木の分布に基づいて、下図のようなエリアを設定します。

エリアごとの管理方針の主な違いは、遷移の進行をどこまでコントロールするかです。エリアAとB1、B3では、遷移の進行を遅らせる管理を行います。エリアB2、C、Dでは、遷移の進行をある程度許容し、自然に近い状態に近づけます。ただし、周辺の都市化や樹林の断片化にともなって生じた変化（外来・逸出種やササ類の繁茂）は、すべてのエリアで抑制します。



A. 松林エリア

見通し、風通しのよいアカマツの林を維持する。低木やアズマネザサが茂るのを抑え、林床を明るく、やや乾いた状態に保つ。明るい林床に特徴的な草本植物の生育環境を創出する（→p8）。

B. 雑木林エリア

コナラ、クスギ、サクラ類などからなる落葉広葉樹林を維持する。常緑樹の侵入やアズマネザサの繁茂を抑え、武蔵野の雑木林のおもかげを残す樹林とする。

B1. 雑木林（林床復元）エリア

アズマネザサが少ない場所では、積極的な林床管理を行い、雑木林に特徴的な草本植物を主とする林床植生の復元に取り組む（→p9）。

B2. 雑木林（階層発達）エリア

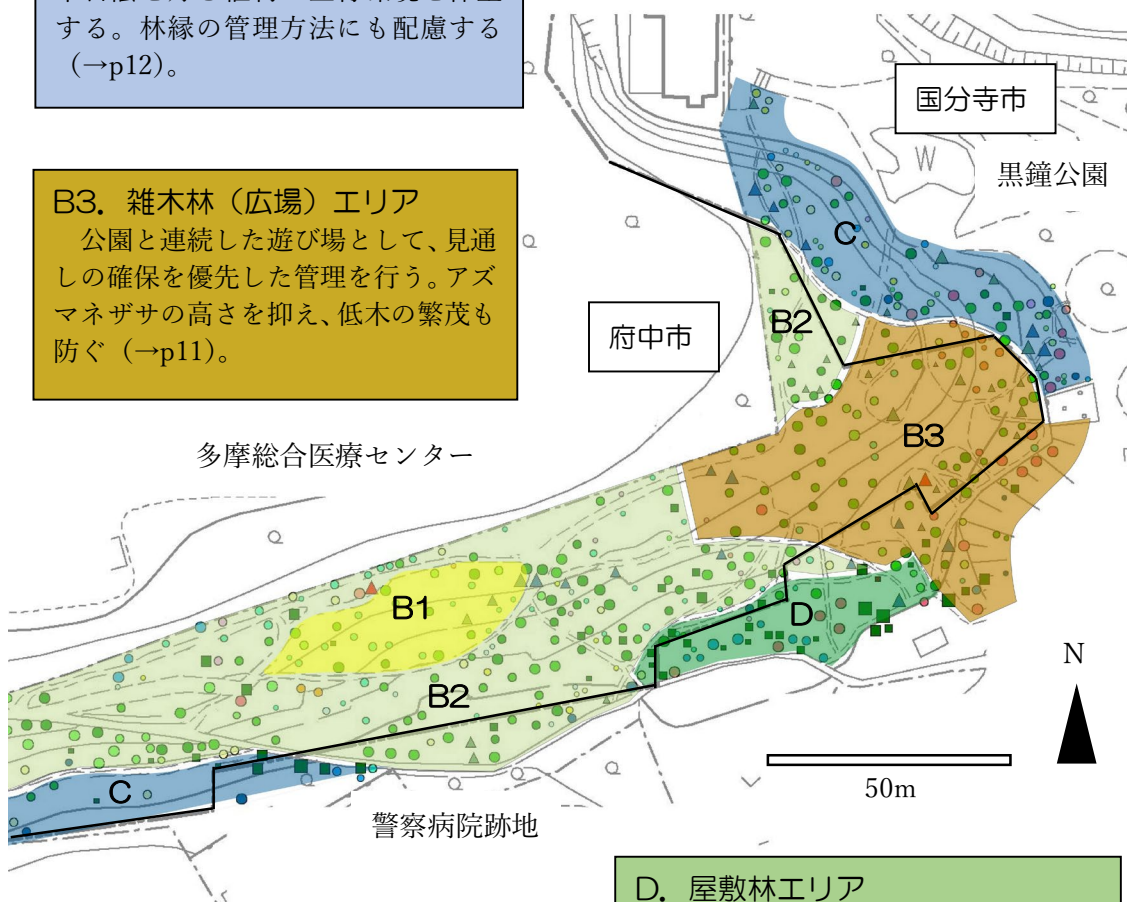
アズマネザサの繁茂を抑えながら、高木の若木や落葉低木の生育を促し、適度に階層構造が発達した自然林に近い樹林とする（→p10）。

C. 崖線林エリア

ケヤキ、クマシデなどが混生した崖線らしい落葉樹林を維持する。湿った半日陰を好む植物の生育環境を保全する。林縁の管理方法にも配慮する（→p12）。

B3. 雑木林（広場）エリア

公園と連続した遊び場として、見通しの確保を優先した管理を行う。アズマネザサの高さを抑え、低木の繁茂も防ぐ（→p11）。



地図中の記号は樹木の位置を示す。

- 落葉広葉樹
- 常緑広葉樹
- ▲ 針葉樹

D. 屋敷林エリア

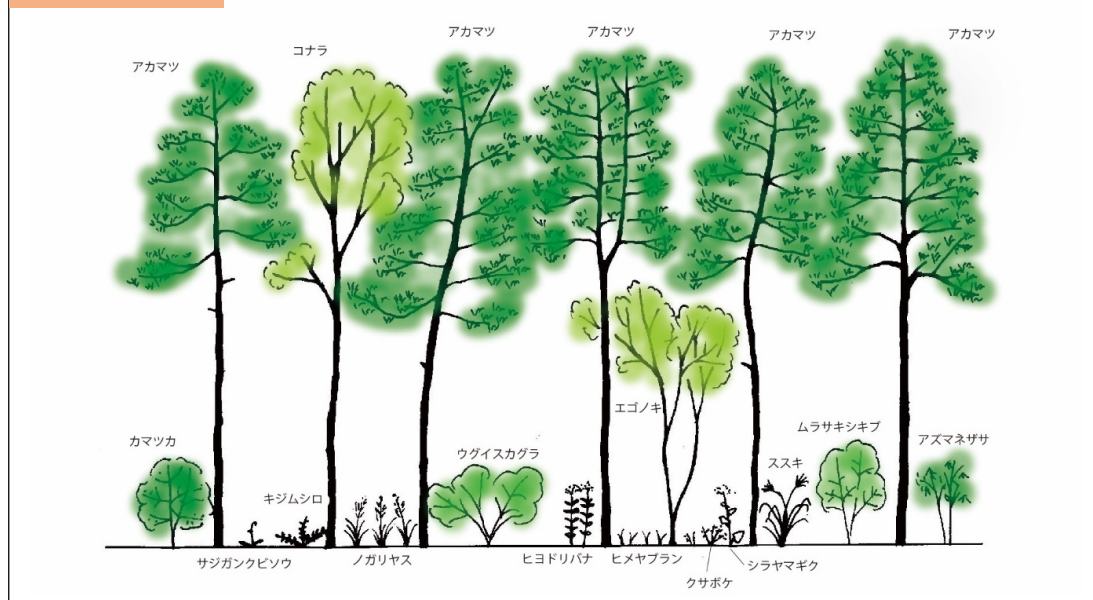
常緑樹のシラカシと落葉樹のエノキなどが交じった、神社の社叢や農家の屋敷林に近い樹林を維持する。常緑樹の増加はある程度許容するが、外来・逸出種は除去する（→p13）。



国分寺市との連携

武蔵台緑地の東側地域は国分寺市域となります。同市域内について保全活動を実施する場合は、市担当者による国分寺市との事前協議が必要となります。緑地全体の一体的な保全を図り、今後の活動を円滑に進めていくためにも、同市とは、緑地の管理・保全方針に関する認識を共有し、連携・協力関係を築くことが肝要です。

目標とする姿

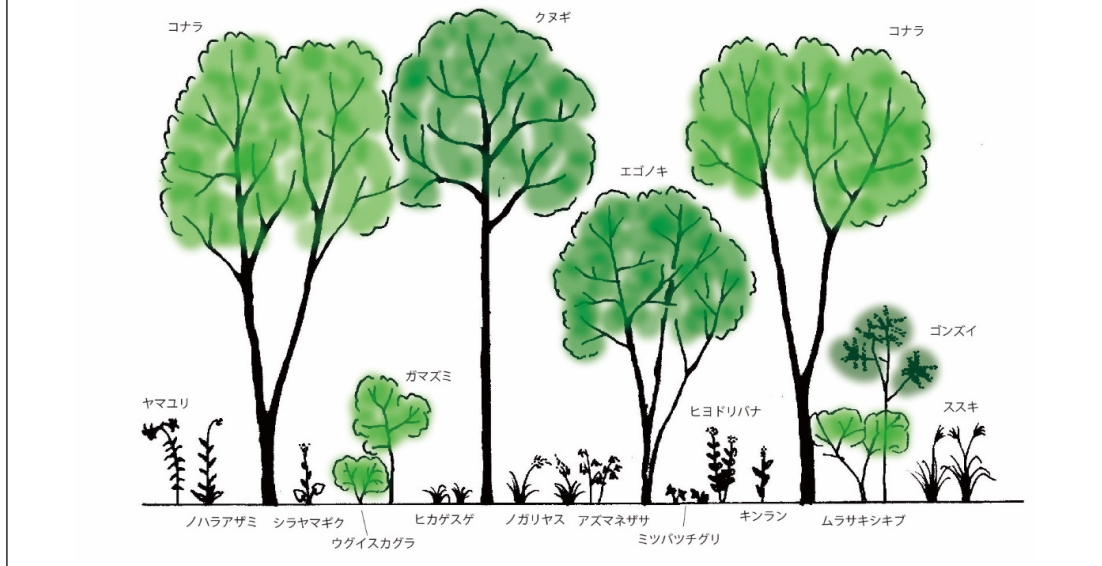


見通し、風通しのよいアカマツ林として維持します。高木層には主にアカマツが生育します。低木層にはカマツカ、ムラサキシキブ、ウグイスカグラなどの落葉低木が生育しますが、数はまばらで林床までよく光が届きます。草本層には、アズマネザサがほとんどなく、ノガリヤス、ヒヨドリバナ、ニガナのような草原～明るい林床を好む植物が生育します。

林床の明るさを保つために常緑樹は除伐し、落葉低木も株が大きくならないように間引きします。低木を覆うつる植物は除去します。高木が枯れた場所ではアカマツの実生を育成し、更新をはかります。腐葉土が堆積しないよう、2～3年に一度は下草刈りと落ち葉かきを行います。アズマネザサが侵入してきたら、ササのみを選択的に刈り取ります。

項目	方針
低木の管理	常緑樹の除伐 低木の整理（植被率 30%未満に保つ）、つる植物の除去
ササ類の管理	ササ類を選択的に刈る
下草の管理	2～3年に一度、晩秋に刈る
その他	下草刈り後に落ち葉かきを行う
指標植物	ノガリヤス、ヒヨドリバナ、ニガナ、キジムシロ、クサボケ、サジガンクビソウ、オオバノトンボソウ

目標とする姿

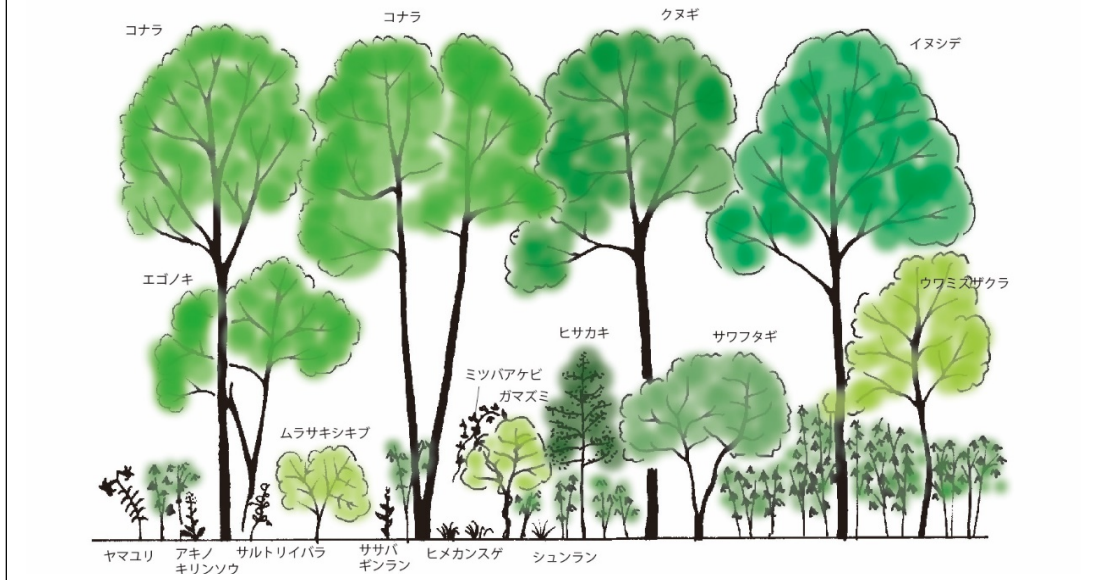


農用林として利用されていた頃の趣を残す、明るい雑木林として維持します。高木層はコナラ、クスギが主で、ヤマザクラなども交じります。低木層にはガマズミ、カマツカ、ムラサキシキブ、ウグイスカグラなどが生育します。草本層にはアズマネザサはまばらで、春にはミツバツチグリなど小型の草本が花を咲かせ、夏から秋にはシラヤマギク、ノハラアザミなど背の高い草本が開花します。

林床の明るさを保つために常緑樹は除伐し、落葉低木も適度に間引きします。低木を覆うつる植物は除去します。アズマネザサが増えてきたら、ササのみを選択的に刈り取ります。腐葉土が堆積しないよう、2～3年に一度は下草刈りと落ち葉かきを行います。ただし、すでに低木やササ類が繁茂している場所では、環境の急激な変化を避けるため、少しずつ手を入れましょう。

項目	方針
低木の管理	常緑樹の除伐 低木の整理（植被率 30%未満に保つ）、つる植物の除去
ササ類の管理	ササ類を選択的に刈る
下草の管理	2～3年に一度、晩秋に刈る
その他	下草刈り後に落ち葉かきを行う
指標植物	ミツバツチグリ、ヒカゲスゲ、シラヤマギク、ノハラアザミ、ススキ、キンラン

目標とする姿

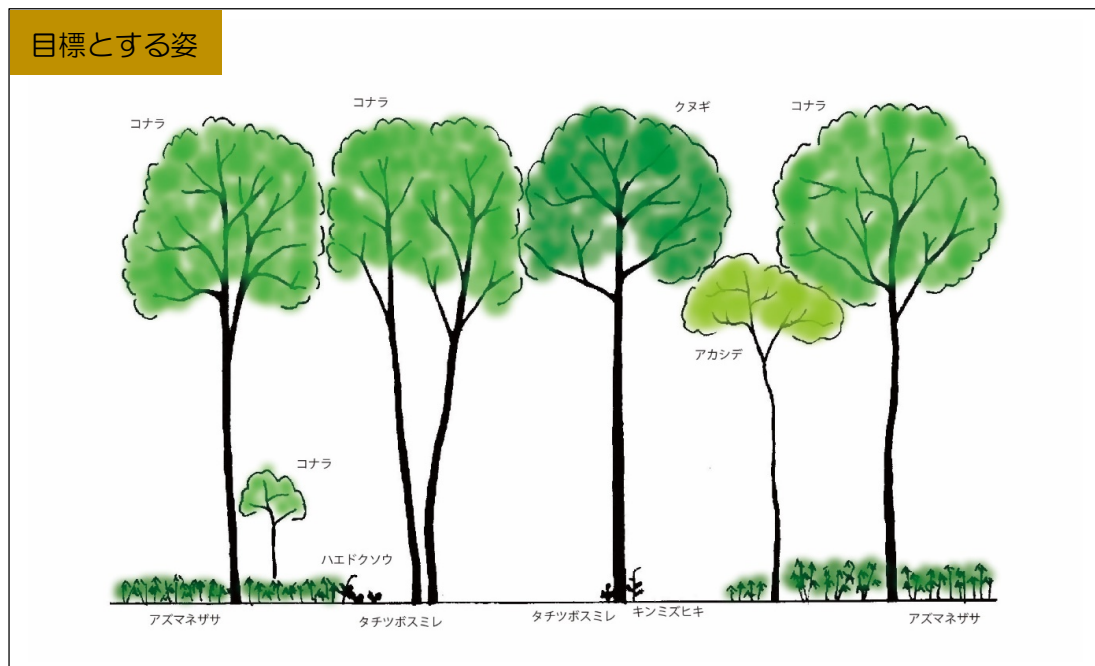


階層構造が発達した自然林に近い樹林として維持します。高木層には、コナラ、クヌギのほか、イヌシデやサクラ類が混じります。亜高木層にはこれらの若木やエゴノキなど、低木層には B1 エリアと同様の落葉低木に加え、ヒサカキなどの常緑低木も多少生育します。草本層にはアズマネザサが広がりますが、林縁に近い光が差し込む場所では、イチヤクソウ、シュンラン、ヤマユリなどの草本や、サルトリイバラ、シオデなどのつる植物もみられます。

つる植物やアズマネザサの生育を許容しますが、藪状にならないよう、常緑樹はなるべく除去し、アズマネザサが腰丈以上になったら刈り取りを行います。ただし、一部はウグイスなど鳥類の生育環境として、ササ類が密生した部分も残します。

項目	方針
低木の管理	常緑樹の除伐（在来種は少し残す） 植被率 30～60%程度に保つ
ササ類の管理	腰丈を超えたら刈る
下草の管理	原則として行わない
その他	低木やササ類は場所により粗密があってよい
指標植物	イチヤクソウ、ヒメカンスゲ、シュンラン、ササバギンラン、ヤマユリ、サルトリイバラ、シオデ

目標とする姿

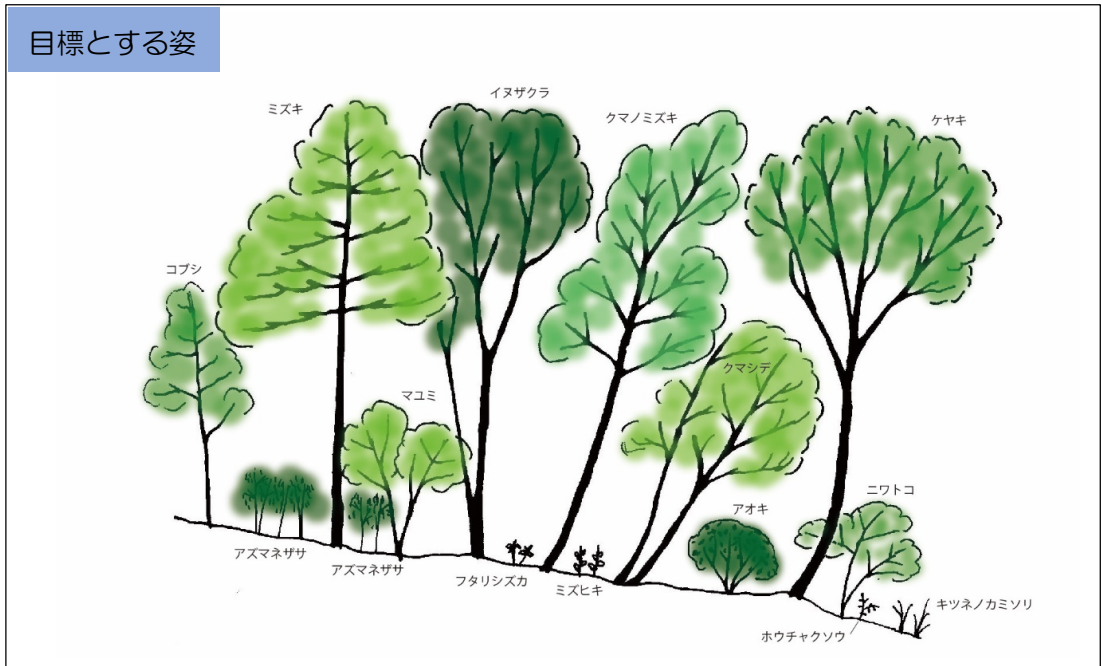


黒鐘公園に接する崖上の平坦地は、子どもの遊び場となるため、見通しの確保と安全性を優先した管理を行います。見通しをさえぎる常緑低木はなるべく除去します。一方、コナラ、アカシデなど高木層を構成する樹種の若木は残し、後継樹を確保します。アズマネザサはひざ丈より高くならないように、2～3年に一度、全面的な刈り取りを行います。希少植物の生育がみられる場合には、その区域を柵で囲むことで、踏みつけから守ります。

倒れそうな枯木や落下しそうな枯枝がある場合には、至急処理します（作業は必ず公園管理者が行います）。

項目	方針
低木の管理	常緑樹の除伐 植被率 10%未満に保つ
ササ類の管理	ひざ丈を超えたら刈る
下草の管理	ササ類と同様
その他	危険木の確認
指標植物	タチツボスミレ、ハエドクソウ、キンミズヒキ

目標とする姿

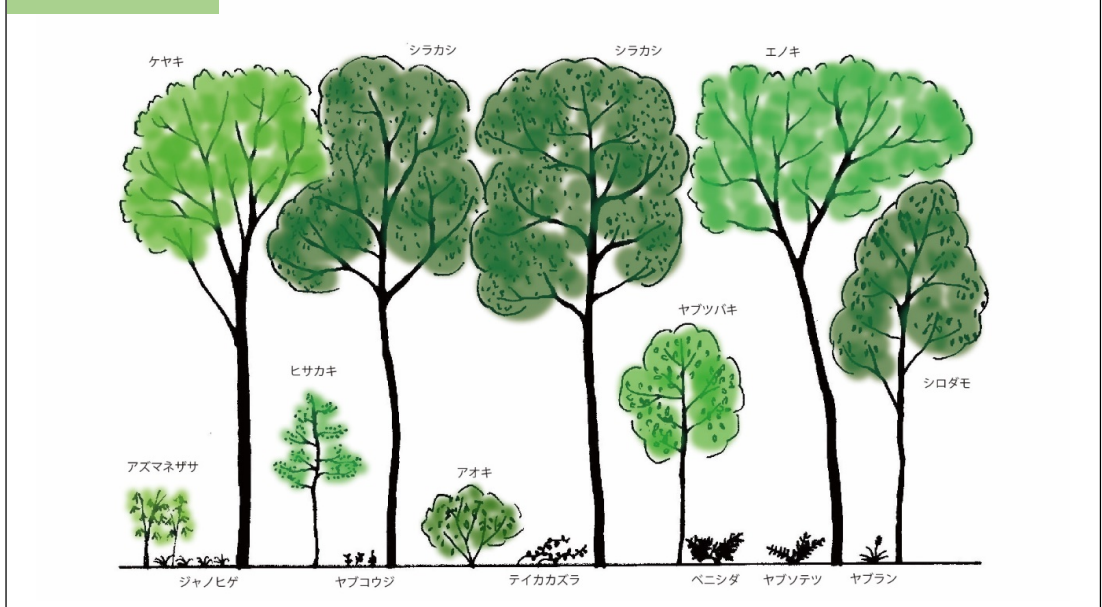


国分寺崖線の崖線林の典型的な姿をもった落葉樹林として維持します。高木層はケヤキ、ミズキ、クマノミズキなどのほか、クマシデ、ヤマトアオダモのような山地の溪谷沿いにみられる樹種も交じります。亜高木層から低木層には、コブシ、マユミ、ニワトコなどの他、アオキのような常緑樹も含むさまざまな低木が生育します。斜面下部の林縁には湿潤な土壌を好む草本が生育し、春にはハウチャクソウやフタリシズカ、夏にはキツネノカミソリの花が咲きます。

自然に近い状態を維持しますが、あまり藪状にならないように、トウネズミモチやシュロなど外来の常緑樹は積極的に取り除きます。林床にシャガなどの植栽由来の植物が広がりすぎたときは除去します。アズマネザサは腰丈を超えない程度に刈り取ります。

項目	方針
低木の管理	外来・逸出種の除伐
ササ類の管理	腰丈を超えたら刈る
下草の管理	植栽された種の除去
その他	林縁の保全に配慮する
指標植物	ケンボナシ、ヤマトアオダモ、ニガキ、ニワトコ、フタリシズカ、キツネノカミソリ、ハウチャクソウ、ヤブニンジン

目標とする姿



ほかのエリアよりも常緑樹が多い、神社の社叢または農家の屋敷林のような樹林として維持します。高木層には常緑樹のシラカシのほか、落葉樹のエノキ、ケヤキなども交じます。亜高木層から低木層には、シロダモ、ヤブツバキ、ヒサカキ、アオキなどの常緑樹が生育します。草本層には、ヤブコウジやヤブランなどがまばらに生育し、テイカカズラ、サネカズラなど常緑のつる植物や、ベニシダ、ヤブソテツなどのシダ植物もみられます。

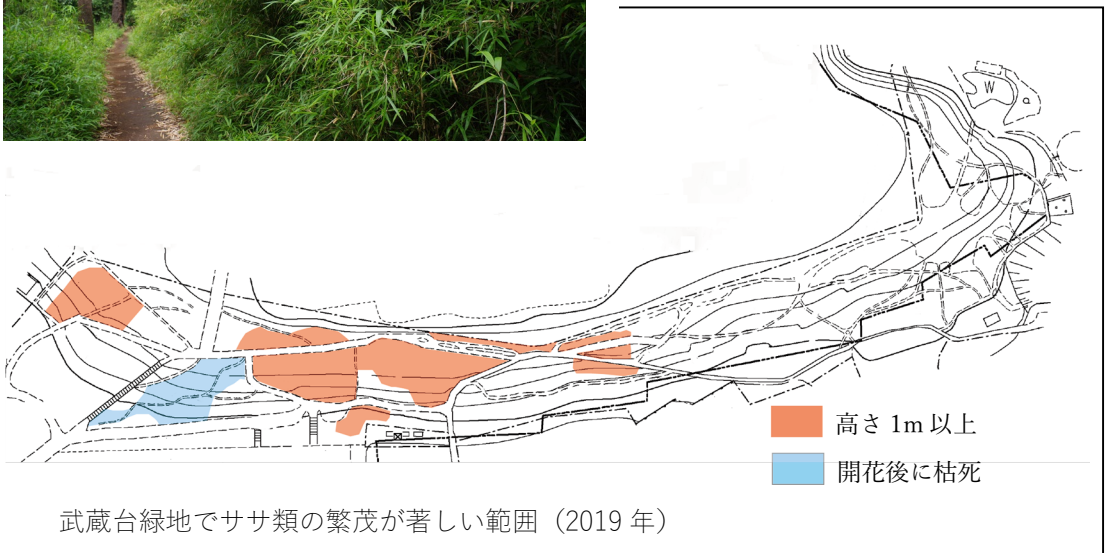
トウネズミモチやシュロなど外来の常緑樹は積極的に取り除きます。林床が暗いので下草が茂ることはありませんが、アズマネザサが侵入してきたときにはササ刈りをします。

項目	方針
低木の管理	外来・逸出種の除伐 低木の整理（植被率 50%未満に保つ）
ササの管理	ひざ丈を超えたら刈る
下草の管理	原則として不要
その他	
指標植物	ヤブコウジ、サネカズラ、テイカカズラ、ベニシダ、ヤブソテツ、オオハナワラビ

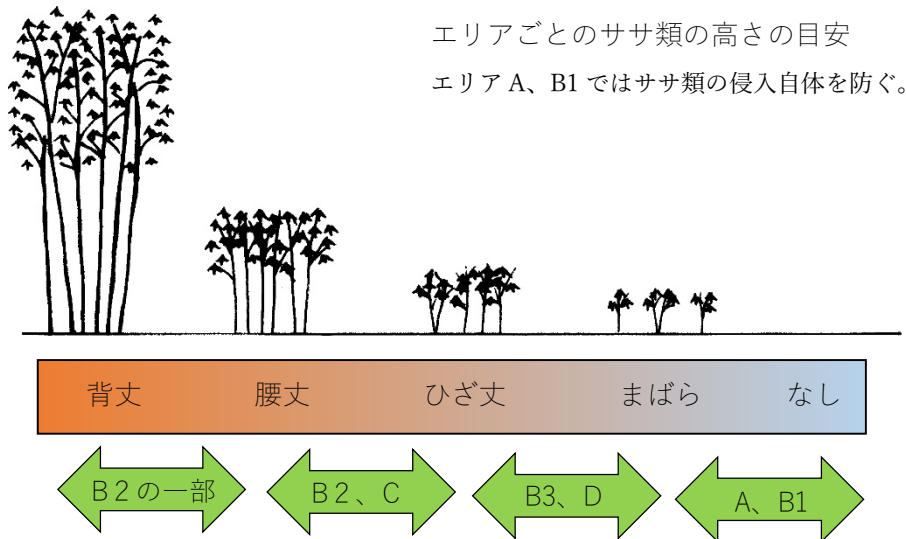
分断されて面積が小さくなった都市の樹林では、アズマネザサ（篠）が繁茂しやすくなります。林床管理が行われず長年放置されると、アズマネザサが人の背丈より大きくなり、密生した藪をつくるようになります。こうなると、若木が育たず森林が更新できなくなるばかりでなく、林内に生育する低木や草本も消失し、多様性が著しく低下します。武蔵台緑地では、アズマネザサのほかにも、メダケ、アズマザサ、クマザサ（植栽）が生育しており、これらササ類の繁茂を抑えることは、すべてのエリアで重要な管理作業です。



←アズマネザサやメダケは放置すると人の背丈より大きくなり、視界をふさぐ壁のようになる。




ササ類は地下茎を伸ばして広がるとともに、地下に養分を蓄えるのにもなって、しだいに太い稈（かん）を出すようになります。稈が太く密生している場所はササ類の拡大拠点となっている部分で、細くてまばらな場所は最近になって侵入してきた部分といえます。いちど密生した状態になったササ類の生育を抑えるのは簡単ではありません。ササ類を増やしたくない場所では、稈が細くてまばらな状態のうちに、早めに刈り取りを始めることが必要です。



繁茂したササ類を衰退させるには、刈り取りを3～4年続けて行います。刈り取りの時期は新しい稈が伸び切った夏から秋が適しています。刈り取っても翌年には地下茎から新しい稈が伸びてきますが、そのサイズはしだいに小さくなるはずですが。

稈の高さが目標とする状態に抑えられたら、様子を見て2～3年に一度刈り取ります。この段階では、他の草本を一緒に刈り取ってしまわないように、草本類が枯れた後の冬に刈り取ることが望ましいです。とくに階層構造の発達を促す場合には、樹木の若木や低木を刈らないよう注意します。

 ササを刈るときは、なるべく地際から切り口が水平になるように刈り取ります。切り口が斜めになると、踏み抜いてけがをするおそれがあります。

ササ類は、数十年に一度花を咲かせて、一斉に枯れる性質があります。武蔵台緑地の西側の区域では、2018年にアズマネザサが開花し、その後枯死しました。このような場所は、労力をかけずに林床植生を復元するのに都合のよい場所です。常緑樹の除伐やササの再侵入を防ぐ刈り取りを行うことで、雑木林らしい植物の生育環境を作り出せる可能性があります。



開花後に枯れたアズマネザサ（2018年）

低木層に常緑樹が増加すると林内が暗くなり、落葉樹の若木や草本が生育しにくくなります。とくに、トウネズミモチ（外来種）やアオキ、シュロなどの増加は、アズマネザサの繁茂とともに樹林の藪化の原因になっています。また、クスノキやユズリハのような高木になるものも増えつつあるため、これらを取り除かないと常緑樹林への遷移が起こります。常緑樹を取り除くことで林内を明るくし、在来の落葉低木の生育を促すとともに、多様な草本種が生育できる環境を維持します。常緑樹の伐採は、高木性樹種では鋸で切れる太さのうちに、低木性樹種では実をつけるサイズに達する前に行うのが効果的です。



アオキ 斑入りのものは明らかに栽培品からの逸出。

人の手が加わらなくなった雑木林や松林が常緑樹林に遷移していくこと自体は、自然に起こる現象です。しかし、武蔵台緑地にみられる常緑樹は、シラカシなど一部を除いて、ほとんどは栽培品が逸出したものです（下表参照）。そのため、放置するとこれらがシラカシなどに代わって優勢になり、本来この地域にあるべき常緑樹林とはかけ離れた姿になってしまうおそれがあります。

エリア(p6-7)ごとの常緑樹の除伐の目安

- × すべて除去、▲ 少しあってもよい、● 適度に残す

* 外来または植栽由来の可能性が高い樹種。

樹種	A	B	C	D
クスノキ*	×	×	×	×
ユズリハ*	×	×	×	×
トウネズミモチ*	×	×	×	×
カクレミノ*	×	×	×	×
クロガネモチ*	×	×	×	×
モッコク*	×	×	×	×
シュロ*	×	×	×	×
チャノキ*	×	×	×	×
ナワシログミ*	×	×	×	×
トベラ*	×	×	×	×
ヒイラギナンテン*	×	×	×	×

樹種	A	B	C	D
スダジイ*	×	×	×	▲
タブノキ*	×	×	×	▲
モチノキ*	×	×	×	▲
ヤツデ*	×	×	×	▲
マサキ*	×	×	×	▲
ナンテン*	×	×	×	▲
マンリョウ*	×	×	×	▲
シラカシ	×	×	▲	●
シロダモ	×	×	▲	●
ツバキ*	×	×	▲	●
アオキ*	×	×	▲	●
ネズミモチ	×	▲	▲	●
ヒサカキ	×	▲	▲	●
イヌツゲ	×	▲	▲	●

低木性樹種は萌芽能力が高いものも多く、根元からたくさんの幹を出して株立ちすることがあります。株そのものを枯らさずに量を減らしたいときは、一株から出ている幹をすべて切ってしまうのではなく、数本を残して間引きします。その際、細い幹を刈り取るのではなく、太い幹を根元から切ります。こうすることで、サイズを小さくして若返らせることができ、花や実のつき方がよくなることも期待できます。庭木の剪定のように枝先だけを刈りこむことは好ましくありません。林内では光が弱いので、葉の量を減らすと衰弱してしまいます。

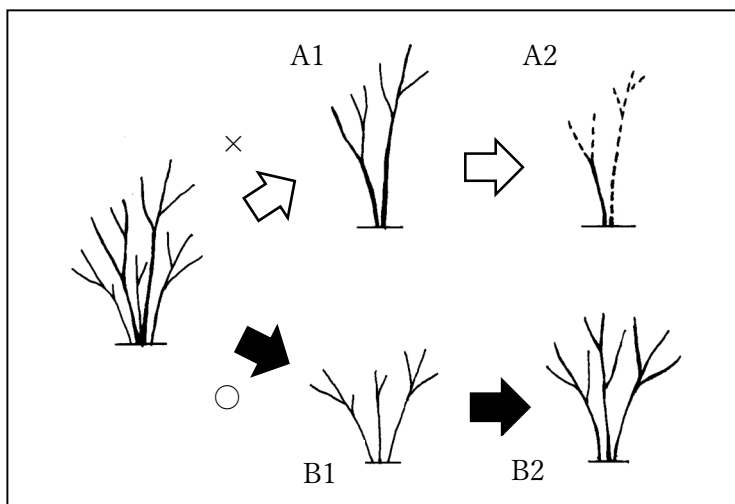
A1: 太い幹を残して細い幹を切り続けると...

A2: やがて太い幹が枯れて、株自体が消失。

B1: 細い幹を残して太い幹を切ると...

B2: 細い幹が成長して入れ替わり、株を維持。

低木の効果的な管理



この作業は、外来・逸出の常緑樹を除伐しても、まだ低木が混みあっている場合のみ行います。

在来の低木性樹種には野鳥の餌となる実をつけるものがあります。林床の光環境が改善することで、多くの低木が実をつけるようになり、野鳥の餌も確保されます。植栽由来の常緑低木 (p16) の多くも、鳥が実を食べて糞とともに種子を排出することで増えていますので、鳥に本来の餌である在来の低木の果実を食べてもらうことは、外来・逸出種の増加抑制につながるかもしれません。

鳥が実を食べる低木の例

- | | |
|---|--|
| 春 | ウグイスカグラ |
| 夏 | ヤマグワ、ヤマウコギ、ニワトコ |
| 秋 | サワフタギ、ガマズミ、サンショウ、
ゴンズイ、マユミ、コマユミ、カマツカ、
イボタノキ、ヤマコウバシ |



ガマズミ

武蔵台緑地では街路樹や庭木が逃げ出した常緑樹が増えています（→p16）が、落葉樹でも、イロハモミジやコブシは植栽した個体から増えたと考えられます。このように国内に分布している植物であっても、武蔵野台地にもともと生育していなかった植物は、地域的な「外来植物」といえます。こうした植物が増えると、武蔵台緑地の本来の自然がどのようなものであったか、わからなくなってしまうので、極力取り除くことが望まれます。



マンリョウ 1980年代には武蔵台緑地にはほとんどなかった。



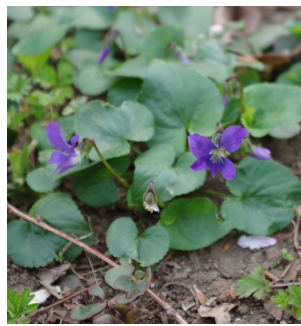
ムサシアブミ 海岸近くの常緑樹林に生育する植物。植栽個体から広がったとみられる。

多くの園芸植物は、林の中に植えても光不足で枯れてしまいますが、中には広がって在来植物の生育環境を奪うものもあります。武蔵台緑地ではノハカタカラクサ（トキワツユクサ）、アメリカスミレサイシン、ハナニラ、ツルニチニチソウなどが注意すべき園芸植物です。これらは見つけしだい取り除きます。

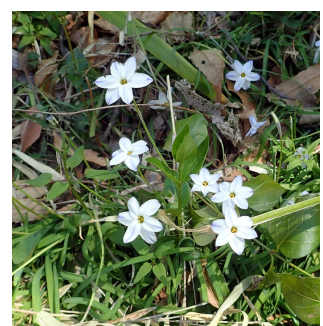
景観を美化するつもりで、林縁や園路沿いに園芸植物が植えられることがありますが、これは新たな外来種を生む原因になるので、避けるべきです。種子ができず逸出しないもの（ヒガンバナ、アジサイ）であっても、林縁環境の保全（→p22）の観点から、樹林周辺への植栽は適切ではありません。



ノハカタカラクサ



アメリカスミレサイシン



ハナニラ

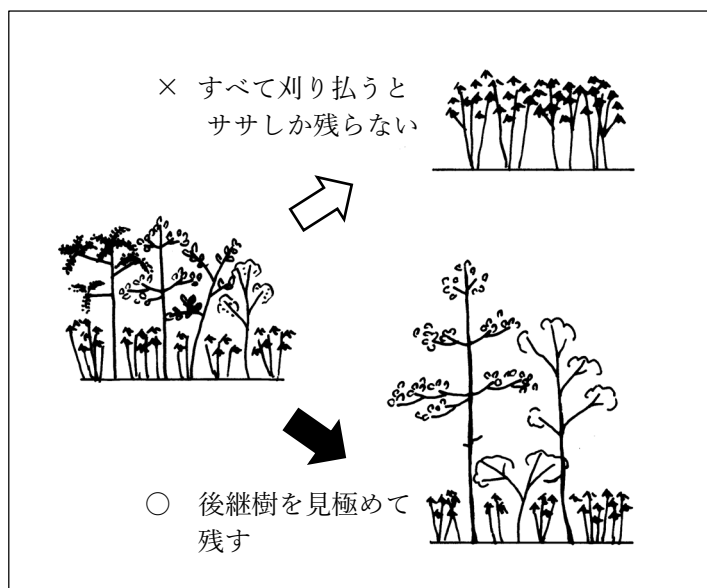
樹林に侵入するおそれがある園芸植物

コナラやクヌギからなる雑木林は、15～20年程度の周期で伐採され、切り株から発生した萌芽（ひこばえ）を育てることで更新されてきました。しかし、木材を薪や炭などとして利用しなくなった現在、このような萌芽更新は行われなくなっています。公園の管理としても、一斉に大面積を伐採することは難しくなっています。そのため、武蔵台緑地では大径木が増え、次世代を担う若木が少ない状態になっています。

一方で、台風などで折れたり、老齢化して立ち枯れたりする樹木が多くなっており、樹木のない部分（林冠ギャップ）が目立つようになってきました。このような場所では、下層まで光が差し込むため、樹木の若木が育ちやすくなります。そこで、林冠ギャップを利用して、失われた樹木の後継樹を育てます。



枯木の伐採によってできた林冠ギャップ



林冠ギャップでの後継樹の育成

ギャップ形成の2～3年後から、少しずつ先駆樹種を除去し、目的の後継樹を育成する。

ギャップには、明るい場所でいち早く成長する樹種が成長します。クサギ、タラノキ、ゴンズイ、アカメガシワなどがその例です。これらの先駆樹種が成長すると、ギャップは一時的に藪のようになりますが、これは傷口をふさぐ「かさぶた」のようなものなので、むやみに刈りはらうことは避けます。すべて刈りはらってしまうと、アズマネザサの繁茂を招き、かえって樹林の回復を困難にするおそれがあります。

ギャップで成長してきた樹木の中から、将来、林冠に達する可能性がある高木性樹種の若木を選んで、それに光があたるように周囲の先駆樹種を除去します。どの樹種を選ぶかは、各エリアの目標植生（p8～13）を参考にしてください。

ここでは、低木やササ類以外の草本類の刈り取りのことを「下草刈り」と呼びます。ササ類が生育していない場所でも、数年間手を入れないとススキなどの大型の草本が増え、植生が単純化することがあります。そのような場合には、必要に応じて下草刈りを行います。樹林管理における下草刈りは畑や庭の「除草」とは異なり、多様な植物が生育できる環境を整えるために行うものです。言い換えれば「草を育てるための草刈り」です。そのため、以下の点に留意して行います。



下草刈りは、エリアAおよびB1以外では、原則として必要ありません。

●草刈りの時期

下草刈りを行う季節には注意が必要です。3月から5月、8月から10月は開花・結実する植物が多いので、この時期の草刈りは避けます。雑木林にはつる植物も多く生育していますので、梅雨前に草刈りを行うと、あとから伸びてくるつる植物が林床に広がり、かえって手がつけられない状態になってしまうおそれもあります。

●「抜き取り」より「刈り取り」

除草ではないので、地下部（根）は残して地上部のみ刈り取ります。森林の植物の多くは多年草で、翌年育つための養分を地下に蓄えていますので、根から抜き取ると絶えてしまいます。また、抜き取りは土壌をかく乱してしまうので、外来種を含む雑草的な植物*の侵入を招きやすくなります。ただし、侵入してしまった多年生の外来種を取り除くには、根から抜き取ることが必要です。

●希少種の保護

個体数が少ない在来種（→p23）は保護の対象になります。生育場所を把握している場合には、作業の前に目印をつけるなどして、刈り取られることを防ぎます。ただし、珍しい植物やきれいな花が咲く植物だけを増やすために、それ以外の植物を除去することは避けるべきです。さまざまな種から構成される植物群落としての樹林を維持することが、生物多様性の保全につながります。

●刈った草の処理

刈った草は林内に残さず、集めて運び出します。刈った草をそのまま放置しておけば、やがて腐って土にかえっていきますが、それは樹林に肥料を与えているようなものです。土が肥沃になると、雑草的な植物*が侵入したり、特定の草本だけが増加したりして、種の多様な林床植生が維持できなくなります。

* ここでの「雑草的な植物」とは、畑地や路傍に生える、森林生でない植物を指します。

林床の植物の生育には、光だけでなく落葉の堆積も大きな影響を与えています。毎年落葉が積み重なっていくと、しだいに腐葉土ができていきます。雑木林や松林に生育する草本植物の多くは、種子が小さく芽生えも小さいため、落ち葉が積もった場所では生育しにくくなります。それに代わって鳥に運ばれるような大きな種子をもった常緑樹などが増えやすくなります。

そのため、林床植生を復元しようとする場合には、ササや下草の刈り取りによる光環境の改善に加えて、適度に落ち葉かきを行うことが有効です。落ち葉かきは、葉が落ちきった12月から1月に、熊手を用いて行います。低木や下草が生えていると作業が難しいので、低木の整理や下草刈りとセットで行うのがよいでしょう。



落葉かきは、エリアAおよびB1以外では、原則として必要ありません。とくに斜面では土壌の流亡をまねくので行いません。

かつての雑木林では、下草や落葉を肥料などの資源として利用していました。しかし、資源利用を前提としない樹林管理では、発生材は廃棄物として処分せざるを得ません。剪定枝や刈ったササや草、集めた落葉などは、分別して決められた集積場所に運びます。分別することによって、木材チップや堆肥として再利用できる可能性があります。逆に分別しておかないと、処理費用が余計にかかることがあります。小枝やササの稈は、粗朶や柵に用いるなど、現地で活用も試みてみましょう。

集積時の分別

現地での利用例

木の枝	⇒ 粗朶（そだ）にして土留めなどに用いる
ササ類	⇒ 太めの稈を簡易的な柵や支柱に用いる
刈草	⇒ 雑草の繁茂を防ぐマルチングとして用いる（樹林外）
落葉	⇒ 花壇や畑用の堆肥をつくる（樹林外）



落葉など発生材の集積所（都立浅間山公園）

発生材の分別と利用例

樹林が広場や園路に接する林縁（樹林の縁の部分）は、林の内部とは異なる植物の生育環境となります。夏は木陰になりますが、樹木の葉が落ちている冬から春先はかなり明るくなります。とくに崖線の斜面下部では、上部から崩れてきた柔らかい土壌が堆積し、肥沃で湿った環境をつくりだすため、崖線林ならではの植物が多く生育する大事な部分です。



林縁の植物群落。ミズヒキ、ヌズビトハギ、ミズタマソウなどが生育する。



キツネノカミソリ 林縁が明るい春に葉を出し、夏に花だけを咲かせる。

林縁は草が茂りやすいため、美観のために花壇が作られたり、落ち葉の掃きだめやゴミ捨て場にされたりしがちです。しかし、ここに生育する植物は、いわゆる「雑草」ではなく、崖線林の重要な構成要素です。林縁も樹林の一部と考えて、破壊しないようにすることが必要です。

草刈りは年1回までとし、土壌をかく乱しない（耕さない）よう配慮することで、林縁に特有な植物の生育環境を守りましょう。



林縁に植えられたシャガが広がり、本来の林縁植物が生育できなくなっている。



林縁を落葉の掃きだめにすると、林縁の環境が破壊されてしまう。

武蔵台緑地には、都内で絶滅の危機に瀕している植物や、府中市内では自生地がごく限られている植物が多くみられます。以下に保護を要する植物と、それらが生育する可能性のある管理区分（エリア）を示します。

RL*	種名	生育エリア**
シダ植物		
	オオハナワラビ	C、D
	ミサキカグマ	B2
	ヤマイタチシダ	B2
	イノデ	B2、C
CR	ハリガネワラビ	B2
	ヘビノネゴザ	B2
	ホソバシケンダ	B2
被子植物（双子葉類）		
	クマシデ	B2、C
	キジムシロ	A、B1
	クサボケ	A、B1
	フジカンゾウ	B1、B2
	オトギリソウ	A、B1
	イタヤカエデ (オニイタヤ)	B2、C
	ニガキ	B2、C
	ツリバナ	B2
	ケンボナシ	C
	ヤマボウシ	B2
	ウマノミツバ	C
NT	イチヤクソウ	B1、B2
	ヤマトアオダモ	B2、C
	オオカモメヅル	B1、B2
	ヤマハッカ	A、B1
	ツリガネニンジン	A、B1
	サジガンクビソウ	A

RL*	種名	生育エリア**
被子植物（単子葉類）		
	ヒメノガリヤス	B2、C
	オオバギボウシ	B1、B2
	ヤマユリ	B1、B2
	ナルコユリ	B1、B2
	ミヤマナルコユリ	B1、B2
NT	ヤマジノホトトギス	B1、B2
VU	キツネノカミソリ	C
VU	ホソバヒカゲスゲ	A、B1
VU	ギンラン	B1、B2
VU	キンラン	B1、B2
NT	ササバギンラン	B1、B2
	サイハイラン	B2
	シュンラン	B1、B2
	マヤラン	B2

* 東京都レッドリスト「東京都の保護上重要な野生生物種(本土部)2010年版」における北多摩地区でのカテゴリ

CR：絶滅危惧ⅠA類

VU：絶滅危惧Ⅱ類

NT：準絶滅危惧

キンランとマヤランは、全国版のレッドリスト（環境省 2015）でVU

** 生育する可能性があるエリア（p6～7 参照）

—参考文献—

<保全の方針について>

- 「府中市都市計画に関する基本的な方針（府中市都市計画マスタープラン）」 府中市都市整備部計画課 編、2010
- 「崖線の緑を保全するためのガイドライン」 東京都都市整備局都市づくり政策部緑地景観課 編、2012
- 「府中市生物多様性地域戦略—府中の生物多様性を豊かにするはじめの一步」 府中市生活環境部環境政策課 編、2015
- 「府中市緑の基本計画 2020」 府中市都市整備部公園緑地課 編、2020

<武蔵台緑地の自然について>

- 「府中市の自然（地形・地質）ガイドブック」 府中市、1985
- 「府中市武蔵台公園野草調査報告書」 東京都府中市自然調査団 編、1988
- 「府中市の植生—地域の自然環境と生物多様性の保全にむけて」 東京農工大学植生管理学研究室 編、2014
- 「府中市自然環境調査（平成 25 年度～30 年度）報告書」 府中市自然環境調査員会議 編、2013-2018
- 「市立武蔵台公園昆虫類調査・自然環境調査報告」 森田敏雄・小泉共司、2015

<樹林管理の手法について>

- 「雑木林の植生管理—その生態と共生の技術」 亀山章 編、1996、ソフトサイエンス社
- 「改訂新版・雑木林をつくる一人の手と自然の対話・里山作業入門」 倉本宣・内城道興、1998、百水社
- 「生態学からみた身近な植物群落の保護」 大澤雅彦 監修・日本自然保護協会 編、2001、講談社サイエンティフィック
- 「植生管理学」 福嶋司編、2005、朝倉書店
- 「東京都保全地域保全活動ガイドライン」 東京都環境局自然環境部緑環境課 編、2014
- 「都市近郊林管理の考え方—市民参加のための手引き—」 独立行政法人森林総合研究所多摩森林科学園、2015

武蔵台緑地 植生管理ガイドライン

2020年7月1日 発行

発行 府中市生活環境部環境政策課

執筆・編集 吉川正人（東京農工大学植生管理学研究室）

印刷・製本 安藤印刷

